フランス国立図書館856写本における目次と索引

―とくにその作者措定について―

瀬　戸　直　彦

書籍には，ふつう目次がある。細かい情報をふくんだ浩瀚な本には，索引のついていることも多い。これは洋の東西を問わず，たぶんどこにでもみられる現象であろう。これらがないと，通読しない読者には何が書かれてあるかわからず，せっかくの内容が生かされない。フランスに例をとれば，小説や詩などのフィクションをのぞくと，日本語の「目次」にあたる table des matières が巻末にあるのがふつうで，研究書などでは，その目次の前に索引 index がついている。目次が巻頭でなく，巻末にあるのは，フランス，イタリア，スペインなど国々の出版物に多いが，最近では英語圏・ドイツ語圏とおなじく，巻頭にくる書籍も増えているようである。

長い歴史を経た仏典や聖書に関連するテクストについて，それを自由に検索できればという願いが，これら目次や索引の起源であろう。仏典にしても聖書にしても，その史料は膨大なものだが，全体を眺めわたして検索する精密な手段を，西欧は中世のころより蓄積してきて，それが近世以降に，文字資料をめぐる情報検索における西欧の優位につながったという説に，どこかで接したことがある。それが事実かどうかは別にして，古代末期から積み重ねられてきた西欧の聖書にかんするテクストも，索引という利便性をもった手段を得たのは12世紀以降のことであった。章や段落を入れて，数字を付された聖書本文の欄外に注を付すことから始まり，重要語句のアルファベット順の索引を作るところまでいく。

ほんらい聖なるテクストは，全体でひとつのまとまった世界を成していて，暗記しておくものであったろう。それに接して著作する者は，神の創造した調和のとれた世界を，全体のなかで探り，自分の書物の構成に反映させていた。その統一体から，索引というものは，テーマ別とかABC順というまったく別の順序により，いわば一部だけを取りだすのであるから，全体の秩序をいわば否定する作業である。索引を利用するということは，要するに，個人的な順序でテクストに接して，聖なる世界を再構成することにほかならない。

このような必要性が高まったのは，聖職者が説教をおこなうにさいして，容易に参照できるレフェランスの需要が増大したからだといわれている。とくにシトー派の修道会の人々の努力によって，聖書の引用句集がさまざまな形で編纂された。聖書の比喩的な意味を，その用いられた個所により参照できるようにしたテーマ別のアルファベット順索引（このコンコルダンスを *distinctiones* 分類引用句集という）は，規模の大きいものだけでも1189－1190年ころに５編存在しているという[1]。12世紀の発明としては，このような形の索引のほかに，以下のような，写本を参照しやすくするための便法があげられている。

（1）各葉（各ページ）上段のランニング・タイトル titres courants

（2）朱字による各章の冒頭の紹介部分 rubrique

（3）イニシアル（冒頭の装飾文字）として朱色と赤色を交互に配置すること

（4）イニシアルの字体を大きくすること

（5）パラグラフ（段落）の指示（チャプターズ・マーク（＝¶）pied de mouche）

（6）ページ欄外への参照記号 renvoi

これらの方法は，少なくとも1220年ころには一般化していたらしい[2]。

1　Mary A. et Richard H. Rouse, «La naissance des index», in *Histoire de l'édition française,* t.I, 1983, pp.77-86（とくに p.80）

ところで，いま問題にしたのはあくまでも，聖書という定まったテクストについてであって，旧約・新約それぞれに，多少の揺れがあるとはいえ，巻名・章・段落は固定していた。これから検討するような俗語の，それも抒情詩のテクストでは，目次はぜんたいを見渡すために必要だが，それをもとに説教するわけではないから，レフェランスを求めるさいの動機が異なり，テーマ別の索引は要求されなかった（いわゆるジャンル別の索引は存在したが）。上の写本の提示方法はもちろん適宜利用するものの，その索引はむしろ，抒情詩の個々の作品が，どの詩人の手によるものであるかとか，その第４詩節を忘れてしまったが，どういうテクストだったろうか，といった切実な疑問と要求にこたえるものであった。incipit とか initia といわれる冒頭の句（出だしの１行）を覚えていることが前提のもとに成立した索引である。

Ⅰ　C 写本の目次と索引

トルバドゥールの C 写本（フランス国立図書館，fonds français, 856）については，これまで，さまざまの機会にとりあげてきた。おそらく13世紀末から14世紀の初頭に，南仏のナルボンヌ近辺で作られた，全427葉におよぶこの大冊の全体像については，いちいち繰り返すことをしない[3]。今回とりあげる冒頭の目次と索引部分の31葉に関連する点について，紹介しておこう。

本文の第396葉の後は，巻末のカイエが紛失しているため，未完の写本である。残っている部分は，各カイエ（冊子・折り丁）が12葉で，これが33冊あってちょうど396葉になっている。各カイエ12葉目の裏（verso）には，本文右下にレクラム（réclame つなぎ語，渡りことば）が必ず存在している。ところが，冒頭に置かれた目次と索引部分の31葉は，11葉目にレクラムが

2　*art. cité,* pp.78-79.

3　とくにつぎを参照されたい：Jacques Monfrin, «Notes sur le chansonnier *C* (Bibliothèque nationale, ms. fr. 856)», in *Recueil de travaux offerts à M. Clovis Brunel,* Prais, 1955, t.II, pp.292-312; 瀬戸「トルバドゥールの C 写本（パリ国立図書館 fr. 856）について」，in『社会科学討究』第115号，1994，pp.305-328.

あって，そこが第１のカイエの切れ目であることはわかる（白紙にしておいた最初の１葉はなにも記されていない）が，残りは12葉と９葉のカイエで，それぞれレクラムはない。整然とした12葉ごとのカイエにより構成された本文にたいして，この部分になにか事故でもあったかと疑わせる構成である。じじつ作者不明のマイナーなジャンルの作品や，作者の複数いる討論詩などを収録する383葉以降，現存写本最後の396葉までは，この目次にも索引にも記載がない。モンフランは，最後の紛失したカイエも含めた383葉以降の目次・索引の部分が，９葉の残りの部分（12－９＝３葉）にあった可能性を示唆している[4]。

それでは最初の白紙の１葉をのぞいた，この31葉の構成はどうなっているだろうか。モンフランはそこの２部仕立てを table I，table II と名づけているが，私は内容から考えて，これを順に目次と索引と考えたい。全体の構成は以下のとおり（Ⅰについては図版１,２，Ⅱについては図版３,４参照）。

Ⅰ　fol. 1 recto – 17 recto：目次（すべて収録順）

作者名（朱字）

各作品の冒頭句――――――収録葉数を示すローマ数字

（verso ではこの逆の順序になる）

Ⅱ　fol. 18 recto – 31 verso：索引

収録個所を示すローマ数字――ABC 順の冒頭句―――作者名

（同一文字内では本文の作者の配列順）

不思議なのは，このうちのⅡ，つまり「索引」は，いかなる目的のためのものであろうかということである。現代の人名索引，事項索引ではない。さきほど指摘したように，冒頭の１行を覚えていなくては，検索のしようがない。もちろん他の写本と照合する場合があれば，他写本の１行目を見て，C での位置を確認することはできる。しかし，羊皮紙による現存写本が30ほどで，その多くがイタリアにあったような状況では，書写の完了した南仏のこの写本を他の写本と照合する機会が，そうあったとは考えにくい。冒頭の１行目，とくに初めにくる語が写本により異なる場合もしばしばある。Långfors（抒情詩・武勲詩以外の韻文作品），Sonnet（prières）らによる，incipit 順の索引が現代でも出版されている。やはり，13－14世紀にかけても，テクストは，暗記（暗唱）していたのがふつうだったのではないだろうか。

4　*art. cité,* p.294.

Ⅱ　訂正ないし補足

さて，この目次と索引について，イシュトヴァン・フランクはその未解決の問題のひとつとして，tables における作者指定と，本文の題目 rubriques における作者指定が異なるのはなぜか，と指摘している[5]。これについては後述するとして，さらに大きな問題がひそんでいるように思われる。目次のほうで作者を訂正・補足している個所が多数見られる（図版２：CCCLIX，CCCLXX 参照）が，これはなぜかという疑問である（索引でそれに対応した処置がまったくなされていないのは，その構成上，余白もないし無理であったろうことは理解できる）。この追加情報は，出だしの句の右側に，直線を付して記されている。

その訂正ないし補足の字体は，同じ写字生によるものであり，朱字で描かれている。しかもモンフランの指摘するように，出だしの句（黒字）と葉数とをつなぐ波線が，それを避けるように引かれているところをみると，目次の構想されたかなり初期の段階から，計画されていたものではないだろうか[6]。そもそもこれは，訂正ではなくて，補足なのではないかと私は思う。この作品の作者については，この写本で指定する人物以外にも，別の作者を措定している場合がありますよ，ということを示すのである。どのような補足がなされているのか，以下にまとめておこう。

5　István Frank, «Babariol-babarian dans Guillaume IX», in *Romania,* t.73, 1952, pp.227-234, surtout p.233.　しかしフランクは，その具体例をあげていない。

6　Monfrin, *art. cité,* pp.294-295; 瀬戸，前掲論文，pp.315-316.

○作者名の補足個所は，全部で83作品におよぶ。

○そのうちの72か所が，別の一人の作者名を記す。

○11か所は，別の二人の作者名を記す（つまり，作者の可能性のある人物が３人いる場合である）

○上の83作品のうちで，1詩人の複数の作品にたいして，別のひとりの詩人の名をまとめて与えているのが２か所（目次 fol.7 r（本文 fol. 166）では３作品まとめて *Daude de Pradas* を *B(ernat) de Pradas* に，また目次 fol.11 v（本文 fol.271）では２作品まとめて *Raimon de Castelhnou* を *Ymbert de Castelnou* に）。

○上の83作品のうちで１か所は，作者の prénom のみの訂正である（目次 fol.15 r（本文 fol.354）で，*Peire de Bocinhar* に *o Guillem*「あるいはギエームとも」と補足している（PC:332））。

○ *Arnaut de Quintenac* の２作品の出だし句の右に，*de Tentiga* とある。これはぎゃくに名前の後半部のみの訂正である（これらの作品は，他の写本ではふつう *Arnaut de Tintignac*（PC:34）によるものとされる）。

具体的にその補足をしるしておきたい。以下の表では，左の段が目次のなかでの葉数指定で，中段が補足されたトルバドゥールの名称，右段はもともと措定されていた名前である。なお綴りはＣ写本のママだが，略字（.B. = Bernat など）・大文字・*u/v, j/i* の区別にかんしては適宜直した。また目次の葉数表示は，じっさいとずれのあることがある。その原因は，本文がいったん綴じられた（製本された）後に，この目次が成立したことを示唆している。すなわち，本文にもローマ数字で各葉数が表の右上に記してあるわけだが，製本すると，本を開いたときにそのページが右側に来て，当然ながら左側は前の folio の裏が見える。その左側のページにあるテクストも右側上の葉数で記してしまっているのである。つまり左側に見える作品は，本文内でじっさいはひとつ前の葉数に書かれている場合がある[7]。たとえば fol.346の Helias Fonsalada の作品（Marc e Bru の作と補足がある）は，346

7　cf. MONFRIN, *art. cité,* p.293, n.5.

葉（CCCXLVI）とあるものの，じっさいは345葉の裏に記されている。

(1)　別のひとりの作者を付加した場合

		attributions ajoutées	*attributions originales*
1	fol. 6	Falquet de Rotmas	Folquet de Marcelha
2	fol. 15	Raymbaudet (PC:387)	Giraut de Bornelh
3	fol. 28	Peire d'Alvernhe	Giraut de Bornelh
4	fol. 50	Bernat Espanhol (PC:61)	Bernat de Ventadorn
5	fol. 51	Guiraut de Quintenac (PC:247)	Bernat de Ventadorn
6	fol. 89	Huc de Pena (PC:456)	Aymeric de Pegulha (PC:10-18)
7	fol. 96	Guillem Fogueyra	Aymeric de Pegulha (PC:10-8)
8	fol. 103	Peire Vidal	Peyrols
9	fol. 108	Pons de Capduelh	Arnaut de Maruelh
10	fol. 108	Falquet de Rothmas	Arnaut de Maruelh
11	fol. 111	Pons de Capduelh	Arnaut de Maruelh
12	fol. 115	Aimeic de Belenuey	Arnaut de Maruelh
13	fol. 115	Falquet de Rothmas	Arnaut de Maruelh
14	fol. 122	Peire Rogier de Mirapeylh	Pons de Capduelh
15	fol. 126	Raymbaut d'Aurenga	Raymbaut de Vaquieyras
16	fol. 127	Raimon de Miravalh	Raymbaut de Vaquieyras
17	fol. 127	Raymbaut d'Aurenga	Raymbaut de Vaquieyras
18	fol. 140	Guillem Magret	Bertran de Born
19	fol. 143	Peire Vidal	Bertran de Born
20	fol. 146	Aymeric de Pegulha	Aymeric de Belhenuey
21	fol. 152	Folquet de Marcelha	Cadenet
22	fol. 160	Perdigos	Guillem Aymar
23	fol. 163	Jaufre Rudel	Guillem Aymar
24	fol. 165	Bernat de Pradas (PC:65-3)	Daude de Pradas (PC:124)

25	fol. 166	Bernat de Pradas (PC:65:2)	Daude de Pradas (PC:124)
26	fol. 166	Bernat de Pradas (PC:65:1)	Daude de Pradas (PC:124)
27	fol. 168	Rigaut de Berbezil	Daude de Pradas
28	fol. 169	Huc de Brunenc (PC:450)	Daude de Pradas
29	fol. 173	Alegret	Marc e Bru
30	fol. 176	Bernart Marti	Marc e Bru
31	fol. 193	Albert de Sestaro	Gaubert de Puegcibot
32	fol. 193	Aymeric de Pegulha	Gaubert de Puegcibot
33	fol. 194	Guiraut de Bornelh	Peire Rogier de Mirapeylh
34	fol. 205	Guiraut de bornelh	Arnaut Daniel
35	fol. 205	Huc Brunenc de Rodes	Arnaut Daniel
36	fol. 207	Guillem de Cabestanh	Arnaut Daniel
37	fol. 210	Peire de Bocinhac	Berenguier de Palou (PC:47)
38	fol. 211	Monge de Montaudo	Guillem de Bergueda
39	fol. 213	Arnaut de Marueil	Guillem de Cabestanh
40	fol. 218	Peire Vidal	Gui d'Uysshelh
41	fol. 232	Prebost de Valensa (PC:384)	Coms de Peytius (= PC:457-12: Uc de Saint Circ)
42	fol. 234	Lamberti de Bonavelh (PC:281)	Helias Cayrel
43	fol. 238	Gaucelm Faidit	Albert de Sestaro
44	fol. 238	Guillem Magret	Albert de Sestaro
45	fol. 238	Bernat de Ventedorn	Albert de Sestaro
46	fol. 240	Bernat Arnaut Sabata (PC:54-1)	Perdigos
47	fol. 244	Gauselm Faidit	Peire Raymon de Tholoza
48	fol. 253	Peire Vidal	Guiraut de Calanso
49	fol. 254	Prebost de Valensa	Guiraut de Calanso
50	fol. 254	Sercamons	Peire Bermon Ricas Novas
51	fol. 255	Helyas de Barjols	Peire Bermon Ricas Novas

52	fol. 257	Peire de Brau (PC:328-1)	Huc Brunenc de Rodes
53	fol. 258	Huc de Sanh Circ	Huc Brunenc de Rodes
54	fol. 263	Peire Rogier	Guillem Montanhagol de Tholoza
55	fol. 267	En Sordel	Bertran d'Alamano
56	fol. 271	Ymbert de Castelnou (PC:251)	Raymon de Castelhnou*(sic)*
57	fol. 271	Ymbert de Castelnou (PC:251)	Raymon de Castelhnou
58	fol. 335	Pistoleta	Jordan de Cofolen
59	fol. 335	Prebost de Valensa	Jordan de Cofolen
60	fol. 336	Jordan de Born (PC:274)	Pistoleta
61	fol. 336	Helyas Cayrelh	Pistoleta
62	fol. 346	Marc e Bru (PC:293-24)	Helias Fonsalada (PC:134)
63	fol. 348	Guillem de la Bacalaria (PC:207)	Huc de la Bacalaria
64	fol. 352	[Arnaut] de Tentiga	Arnaut de Quintenac (PC:247)
65	fol. 353	[Arnaut] de Tentiga	Arnaut de Quintenac
66	fol. 354	Guillem [de Bocinhac] (PC:212)	Peire de Bocinhac (PC332)
67	fol. 354	Guillem [de Bocinhac]	Peire de Bocinhac
68	fol. 357	Guy d'Uyshel	Guillem de Salanhac (PC:235)
69	fol. 361	Peire d'Alvernhe	Geneys lo joglars a cuy lo voutz de Lucas det lo sotlar
70	fol. 362	Jordan de Born (PC:274)	Rostanh de Mergas (PC:428)
71	fol. 364	Pistoleta	N'Ozils de Cadartz
72	fol. 364	Bernat de Ventedorn	Peire Bremon lo Tort (PC:331)

(2) 別に２人の作者を付加している場合

		attributuions ajoutées	*attributions originales*
1	fol. 49	Falquet de Rothmas Arnaut de Maruelh	Bernat de Ventedorn

2	fol.106	Arnaut de Maruelh	Peyrols
		Peire Vidal	
3	fol.160	Rostanh de Mergas (PC:428)	Cadenet
		Escudier de la Ylha (PC:276)	
4	fol.222	Falquet de Rotnmas	Helyas de Barjols
		Aimeric de Belenuey (PC:9)	
5	fol.236	Aymeric de Belenuey	Albert de Sestaro
		Raymbaut de Vaquieiras*(sic)*	
6	fol.239	Faidit de Bel Estar (PC:146)	Perdigos
		Arnaut de Maruelh	
7	fol.241	Raimon Jorda	Perdigos
		Raimbaut de Vaquieyras	
8	fol.270	Guiraut de Calanso (PC:243-10)	Aymar de Rocaficha (PC:5)
		Arnaut de Maruelh	
9	fol.347	Bertran de Sayshac (PC:90)	Huc de la Bacalaria
		Marc e Bru (PC:293-15)	
10	fol.359	Huc Brunenc (PC:450)	Arnaut Plages (PC:32-1)
		Peyrols	
11	fol.370	G. Mogier	Augier de Sanhdonat (PC:205-5) (= Guillem Augier Novella)
		Guiraut de Calanso	

この(1)(2)の表から観察できることを，私なりにまとめてみると以下のようになろうか。

1°当然ながら，写本の成立時に近い作者，ほとんど同時代人であったはずのトルバドゥールについては，補足がない（たとえば(1)の57-58の間には，ペイレ・カルデナル，ギラウト・リキエル，セルヴェリ・デ・ジローナの膨大な作品が収録されているが，いっさい補足はない）。

2°補足された作者名には，C写本のこの目次の補足部分にしか見られない，いわゆるtroubadours-fantômes（完在しない「幽霊詩人」）が比較的多い[8]。

3°補足された名にせよ，もとの作者名にせよ，この追加・訂正にしばしば登場する詩人がいる。たとえば：

○ Arnaut de Maruelh: (1)-9, 10, 11, 12, 13（もとの作者名），(1)-39（補足された名），(2)-1, 2, 6, 8（補足された名）

○ Falquet de Rothmas (= Falquet de Romans: PC:156): (1)-1, 10, 13, (2)-1, 4（補足された名）

○ Huc Brunenc: (1)-28, 35, 52, 53（もとの作者名），(2)-10（補足された名）

○ Raymbaut de Vaquieyras: (1)-15, 16, 17（もとの作者名），(2)-4, 5（補足された名）

○ Marc e Bru: (1)-29, 30（もとの作者名），62（補足された名），(2)-9（補足された名）

○ Pistoleta: (1)-58（補足された名），60, 61（もとの作者名），71（補足された名）

4°本文中のrubriquesにおける作者措定と，この目次の部分（補足部分にかぎらない）の名の相違：Marc e Bru（目次），Marcabru（本文のrubriques）。フランクの指摘したこの写本における未解決の点の，これは実例であろう。本文中でもこの詩人は，「Marcabruがこの詩とメロディーを作った」

8 cf. Angelica Rieger, «Les troubadours-fantômes en Italie», in *Atti del secundo congresso Internationale della AIEO, Torino, 31 agosto-5 settembre 1987,* Università di Torino, 1993, pp.327-347. リーガーによれば，PC（= Pillet et Carstens, *Bibliographie der Troubadours*）の書誌に登録されたトルバドゥール460人のうちで，78人がfantômesであり，そのうち38人は，Peire de Bussignac (PC:322)をGuillem de Bussiganc (PC:212)とするたぐいのprénomの誤りと，Guillem de l'Olivier (PC:246)をGuillem de Lobevier (PC:222)と記してしまうような，綴りのうえでの誤りにすぎないという。しかし残りの40人は，このような単純な説明では，出現の理由のわからない名前であるよし。

fetz Marabru lo vers e·l so とみずから述べている（fol.177d, PC:293-35, v.2）。C 写本の寄せ集め的な性格からすれば，このくいちがいは理解できるという評者もいるが，それだけの問題であろうか[9]。

モンフランはこの新しい作者措定を，ébauche de travail critique（テクスト設定作業の萌芽）と述べている。たしかにそう言えるかもしれない。ひじょうに興味深い補足ではあるが，とりあえず，問題点を指摘したうえで，C 写本で補足といえばこれにとどまらないことも，つぎに示しておきたい。

Ⅲ　他の写本との比較

これまで他の写本の目次については述べてこなかった。収録した作品の目次を冒頭にもつ写本は，C 以外にも，ABDEIKMR など多数にのぼる。しかしアルファベット順の出だしの句の索引までついて，これほど整然とした構成の目次と索引を備えた写本はないようである。

たとえば C とならんで，あるいはそれ以上にテクストの質が良い（C のような癖がない）とされる A 写本（Roma, Biblioteca Apostolica Vaticana 5 232）は，抒情詩を626作品書写しているだけではなく，52にのぼる「伝記」vida までも収録している。しかしその目次は７葉のみ（ただし２段組み）で，葉数の指定もない，いたって簡素なものである（図版５参照）。目次冒頭には，*D'aissi enavan son escriut li comenssamen de las canssos que son en aqest libre* (fol 1r)：「これから，本書にあるシャンソンの冒頭の句が記される」とあり，各詩人の冒頭部にある「伝記」についての言及はない。そのあとでテンソン（討論詩）（fol.5r），シルヴェンテス（風刺詩）（fol.6r）の出だし句一覧が，同種の前書きのあとに続いて table は終わりである。

9　Barbara Spaggiari, *Il nome di Marcabru – contributi di onomastica e critica testuale,* Spoleto, Centro italiano di studi sull'alto medioevo, 1992, pp.139-140 (cf. N. Seto, «*Fals'amor* de Marcabru selon un chansonnier occitan», in *Actes du congrès international: Lesser-Used Languages and Romance Linguistics,Université Waseda à Tokyo, avril 17-19, 1997,* Roma, à paraître).

また，収録作品860，「伝記」が86篇添えられた K 写本（Paris, フランス国立図書館，fr. 12 473）では，fol.2r-9r にわたって，シャンソン，テンソン，シルヴェンテスの作者別目次（C のような，作者名のあとの出だし句の記述はない）があり（fol.2r-v），出だし句別の索引は，ジャンル別に作者ごとに（fol.3r-9r）並んでいる。整然とした構成とはいいがたく，参照に不便である。前書きは，A 写本と同じように，*Aqui son escrig li nom delz trobadors que son en aquest livre que ant*(sic) *trobadas las chansos l'uns apres l'autres* (fol.2r)：「本書でシャンソンを順番に収録したトルバドゥールの名前が［順に］以下に書かれる」などとある（ペイレ・カルデナルとベルトラン・デ・ボルンのシルヴェンテスが，本文でも目次でも別だてになっていることに注意したい）。

それにたいして C 写本ではどうであろうか。目次の部分は，*So son los comensamens de las chansos e primeiramen d'En Folquet de Marcelha*「以下がシャンソンの出だしの句であって，まずフォルケット・デ・マルセリャ殿から」とある（fol.1r）（図版１）。また索引は，*Ayssi so los comensamens de las chansos de tot aquest libre, ordenandas per .a.b.c.*「つぎは本書ぜんたいのシャンソンの，アルファベット順に並べた出だしの句である」（fol. 18 r）（図版３）と簡潔に書かれるのみである。しかし，とくに200葉以下，収録作品が10以下の作者になると，目次のトルバドゥール名に，補足情報がつく。そのなかで目立つのは *de* ＋地名を付加することで[10]，*Peire Raimon de Tholoza* (fol.241), *Guillem Peire Cazals de Caortz* (fol.245), *Huc Brunenc de Rodes* (fol.257), *Peire Cardenal del Puey* (fol.272), *Guiraut Riquier de Narbona* (fol.288), *Raimon Gaucelm de Bezers* (fol.332), *Gauiraut d'Espanha de Tholoza* (fol.336), *Guillem Anellier de Tholoza* (fol.341), *Guillem Mogier de Bezers* (fol.351) などである。他の写本にない，地の利を生かした情報という印象である。 ジョアン・エステーヴ Johan Esteve などには，*de Bezers*「ベジエの人」とつけるだけではおさまらず

10　作者名の目次における一覧は，瀬戸，前掲論文 pp.311-315を参照。

に，*om appelava Olier de Bezers*「かつて人はベジエのオリエと呼んでいた」と加えている（しかしこれはいかなる意味なのだろうか）。

この種の親切な補足が裏目に出たものとして，フランクは，Servezi de Girona の例をあげている[11]。C 写本のせいで，このカタロニアのトルバドゥールの名が誤って広まってしまったというのである。この詩人については，C は16作品（fol.311-16）を収録しているのだが，他の写本が *Cerveri* とのみ記すのにたいして，わざわざ「ヘローナの」とつけた。しかし *Cerveri (Servezi)* という名じたいが，「セルベラの」（CERVERINUS → de Cervera）という地名を含んだ名称であり，地名が二重になってしまったわけである（もっとも C 写本のこの補足は，マルタン・デ・リケールらによれば，あながち誤りではない。この詩人の本名は Guilhem de Cervera であって，アラゴンのハイメ１世より拝領した自分の土地の司教区名をとって，いわば筆名として，de Girona をつけたという）[12]。

わけても奇妙なのは，本文では fol.360c，目次では fol.15v にある詩人の名にかんしてであろう。これには *Peire d'Alvernhe* の名が別に付加されている（図版２（左ページ）：fol.15v, 上から20－21行目）から，上の表の (1)-69で，すでにあげてある。すなわち「ルッカの聖像が靴を与えたジョングルールであるジェネイス」という作者名で記される作品である。その内容は「真実の神よ　あなたにわが身をささげます」*Dieus verais, a vos mi ren* の一行で始まる敬虔な宗教詩である。祈祷の詩といってもよい（PC:175-1: Geneys lo Joglar = PC:27-4b:Arnaut Catalan）。C の索引のほうでは，D の字で始まる出だし句の項に，*Geneys lo joglars de Lucas* (fol.22v) と記されている。本文の導入の句 rubrique では，目次とほぼ同様の指定がなされているが，イニシアルが切除されているために，一部読めなくなっている。C だけでなく M 写本 fol.187にも収録されていて，そこではアルナウト・カタランに措定されている。付加されたペイレ・ダルヴェルニェを入れて，作者の可能性は３人というわけだが，アルナウト・カタランの作と考えるのがふつうである。それにしても C のこの作者措定は不思議ではないだろうか。ルッカの聖像とジョングルールというとりあわせは，ゴーチェ・ド・コワンシやアナトール・フランスの作品で有名なノートルダムの軽業師と同種の逸話に関係がある。しかし，神に祈るというテーマはともかくとして，この作品の内容とはとくに関連はない。これについては，稿をあらためて検討したいと思う。

さらに問題になる点は，写本の編纂者にたぶん地理的・時代的・心理的に近い人物にかんして，敬称をつけていること。たとえば，*Mecier Matfre Ermengau de Bezers*（目次 fol.16v, 本文 fol.377b），*Mossenher En Peire, reys d'Arago*（目次 fol.17r, 本文 fol.382b），*N'Ozils de Cadartz*（目次 fol.15v, しかし本文 fol.363d には，*N'* はついていない）などである。これらも作者と編者（写字生）との関係を探るうえで，興味深い付加情報である。マトフレ・エルメンガウに付された *mecier* «messire, monsieur» とは，どのようなニュアンスをもつものであろうか。本文の rubrique でもマトフレにはこの敬称がつけられているが，これらの作者全体を目次と本文でつきあわせることも必要だろう。本文の，作品導入の句についてもっとも長い情報の付加は，ギラウト・リキエルの作品集冒頭（fol.288b）のものであり，ギラウトの作品（fol.288c-311b）には，そのあとに来るジョアン・エステーヴ（fol.328a-332a）とライモン・ガウセルム（fol.332a-334c）の作品ともども，製作年代やジャンルがいちいち記されている。この重要な補足情報については，すでに紹介したことがある[13]。

11　Frank, *art. cité,* p.234.

12　Irénée-Marie Cluzel と Geneviève Brunel-Lobrichon の執筆した *Dictionnaire des lettres françaises, le Moyen Age,* Paris, Fayard, 1964, 2e éd. 1992, の Cerveri de Girona の項（pp.231-234），ならびに *GRLMA,* vol. II, t.1, fascicule 7, p.362による。Guilhem de Cervera に同定するについては，コロミネスの強烈な反対論がある (cf. éd. Joan Coromines, *Cerverí de Girona, Lírica,* Barcelona, Curial, 1988, 2 vols., t.I, p.5, n.1, p.15, p.20).

13　瀬戸，前掲論文，pp.309-310, 317-318;「寡黙の饒舌―中世南仏の二人の写字生」，in『新村猛先生追悼論文集』，1998, pp.225-236とくに p.235.

Ⅳ　網羅主義か

ジュネーヴ大学のマウリツィオ・ペルージは，C 写本の性質を「一大集積所」grand receptacle と形容している[14]。その校訂をほどこしたアルナウト・ダニエルの一作品（PC: 29-8）において，第５詩節にふたつの系統のテクストがあって，他のさまざまな写本が，そのふたつのうちの，いずれかを記しているのに，C はその両者ともを収録している事実をみて，そう評したのであった。これはテクストの内容上の問題であるが，目次と索引の構成や補足情報をみても，ある意味で正しい指摘かもしれない。ただし，ギエーム９世の「詩をつくろう　眠りこんで」で始まる作品（PC:183-12）のテクストをみれば，ただやみくもに収録しているのではなく，きちんと取捨選択して，自分のわかるところのみを入れたとも言えるから，一部の作品のみを見てすべてがそうだと断じるのは早計であろう[15]。

さきほど表にまとめた作者名の追加について，一例だけ検討してみよう。Pistoleta というトルバドゥールについてである。Pillet-Carstens の書誌では，10作品ほどがこの作者のものとされている，さほど知られた詩人ではないものの，C の追加には４か所が関連する（(1)-58, 60, 61, 71）（71については，図版２, fol.15v の下から１行目より fol.16r の上から1行目を参照のこと）。

〔Pistoleta の名が補足されるもの〕

① fol. 335: PC:372-6: Jordan de Cofolen: ５写本のうち，D83, N²4, R21, a¹482 の４写本は Pistoleta 名義で，C も補足でこの名を記す

② fol.364: PC:314-1: N'Ozil de Cadartz: ７写本のうち, C と D82, M147, R41 の４写本が Ozil de Cadartz 名義で，I105bis, K90, d289の3写本は Guillem de Cabestaing 名義，C のみ補足で Pistoleta と記す（ただし索引のほうには補足がない。図版４，fol. 20r の下から７行目を参照）

〔もともと Pistoleta 名義で，別の名が補足されるもの〕

③ fol.336: PC:372-2: Pistoleta: ８写本のうち，C と Dª177, I137, K123, R101 の５写本が Pistoleta 名義で，F27, a215の２写本は Pons de Capdoill 名義，残りの G102は作者名なし。C のみ補足で，Jordan de Born (PC:274) の名を記すが，この名の詩人は C がもう１か所 Rostaing de Mergas なる詩人に補足として載せるのみ（上の表の(1)-70）

④ fol.336: PC:372-3: Pistoleta: 16写本（ほかに古フランス語への換骨奪胎版が４作品）のうち C と，Da178, I138, K123, α が Pistoleta 名義で，R52 と C の補足が Elias Cairel 名義, G103, J12, L4, P65, T68, 69, VeAg, X82♪, Y2, θ, κ の10写本が作者名なし

となる。これを見ると②③のように C 写本の独自の情報によるものと，①④のように他の写本と情報の重なるものがある。①のもともとの名義である Jordan de Cofolen は, Pillet-Carstens によれば, Jordan de Bonel (PC:273) と同一人物とされる。いずれにしても，補足情報がすべて C の独自のものというわけではなく，この Pistoleta の例以外をみても，とくに R 写本と作者措定の関連がありそうである。C 写本はたんなる網羅主義を信奉しているのではない。その裏にひじょうに複雑な写本伝承があり，編纂者はさまざまの情報を勘案したうえで補足をほどこしているのではないだろうか。

このことは，補足部分や，作者措定にとどまらず，テクストの内容そのものについても言えることで，マリア・カレリは，ほんらい C とは伝承の系統の異なる b³（マドリッド王立図書室で自分の発見した M^h2 写本のうちの，散逸したミケル・デ・ラ・トール本からとった部分）のテクストが，ときどき C の孤立した読みと同じ読みを示しているという[16]。もしこれが事実ならば，

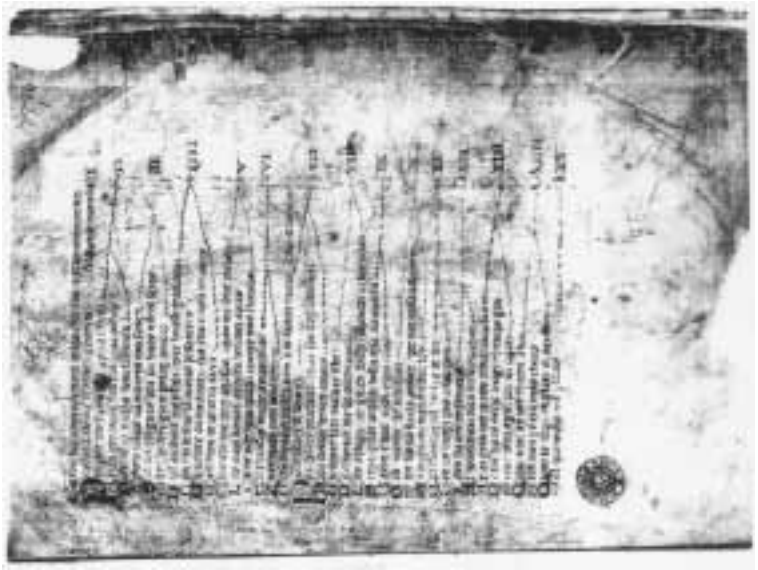
14　Maurizio Peruji, «Variantes de tradition et variantes d'auteur» in *La France Latine,* t. 129, 1999, p.124.

15　N. Seto, «Pèlerin absorbé dans une réverie diabolique: *Farai un vers, pos mi sonelh* de Guilhem IX», in *La France Latine,* t.116, 1993, pp.27-58, surtout p.48.

そしてたんなる偶然の一致でなければ，C の編者ないしは写字生の介入とか，おせっかいとして，しばしば片づけられ，ときには軽視されがちないくつかのテクストは，じっさいは複雑な伝統に由来するものということになる。

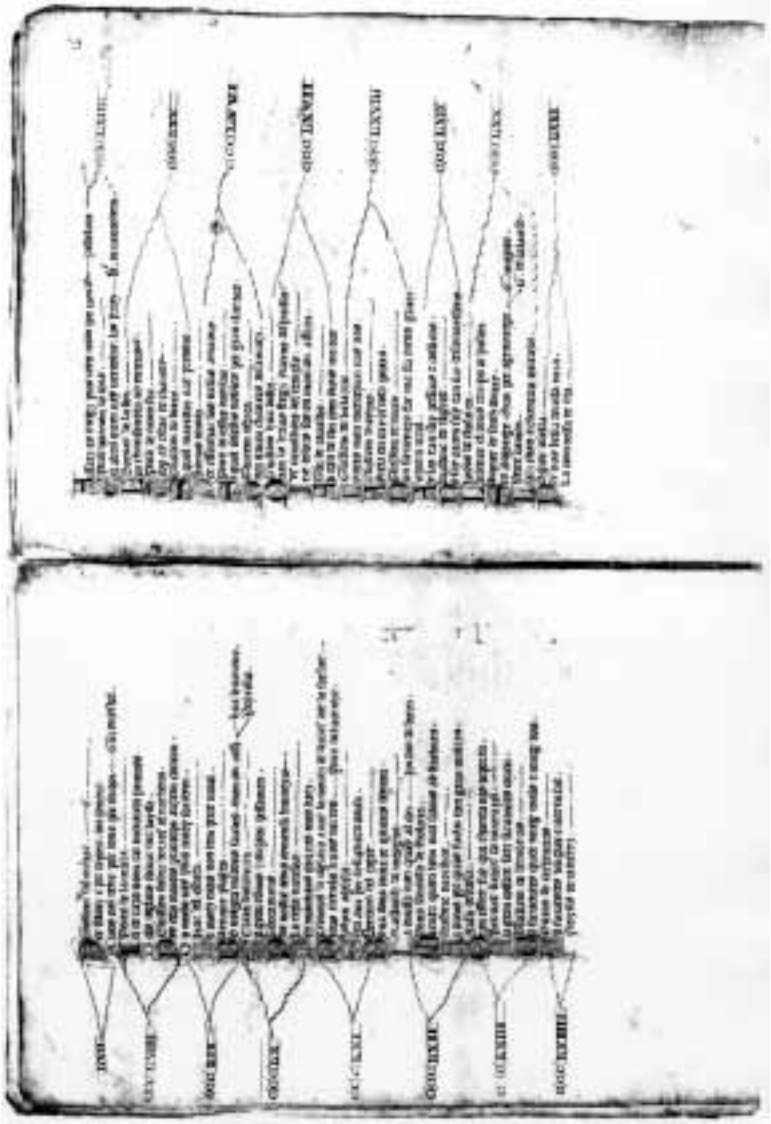
伝本の裏に隠れた，いまは失われたその伝承を探ることは容易ではない。しかし，それが C という「集積地」の性格を知ることにつながり，ひいては現存のテクストのより正確な理解にいたるとすれば，さまざまの方向から，その形跡をたどることも無駄ではないだろう。そして，目次や索引は，それを多少とも写す鏡の役割を果たしているのである。

（せと　なおひこ　文学部教授・図書館副館長）



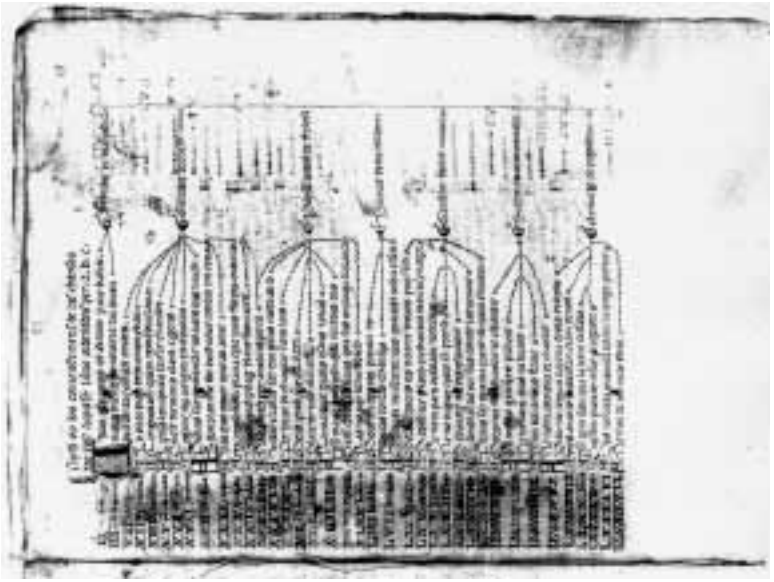
図版 1：C 写本の fol.1r（B.N.F.f.fr.856）

16　discussion après la communication («Alla ricerca del libro perduto: un doppio e il suo modello ritrovato») de Maria Careri, in éd. Madeleine Tyssens, *Lyriques romanes médiévales: la tradition des chansonniers, actes du Colloque de Liège, 1989,* Université de Liège, 1991, p.377.

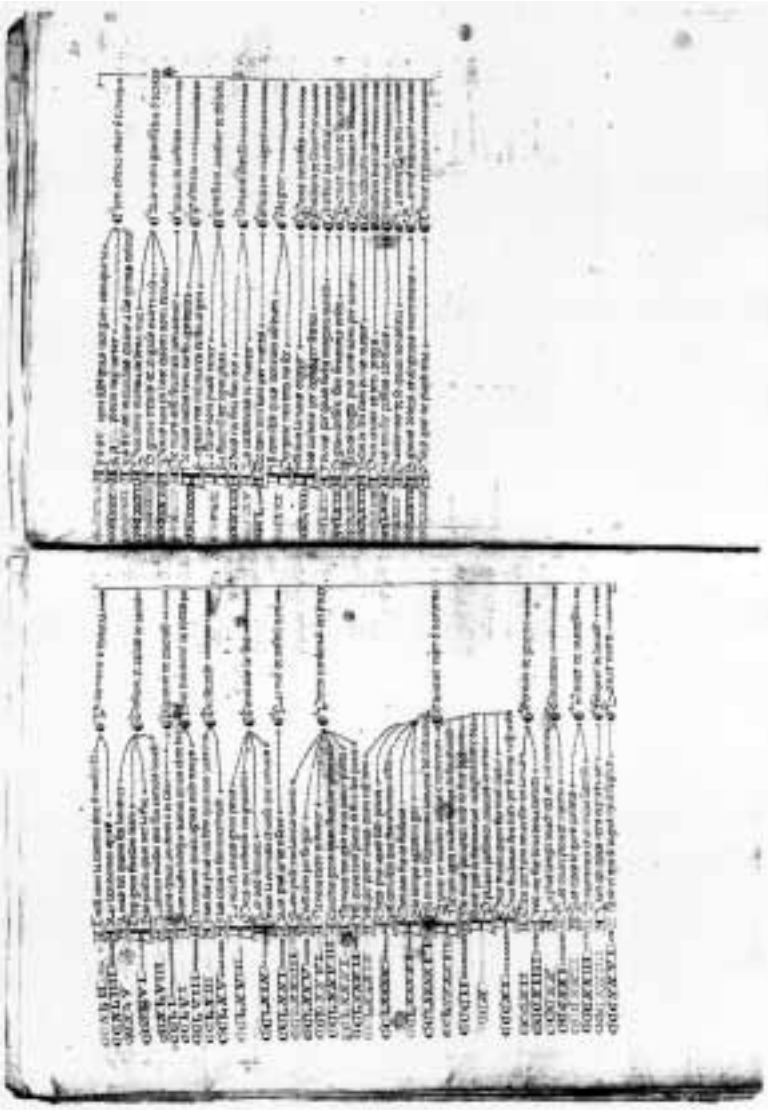


図版 2：C 写本の fol.15v-16r

図版 5：A 写本の fol.1r（Vatican, Biblioteca apostolica Vaticana 5232）



図版 3：C 写本の fol.18r



図版 4：C 写本 fol.19v-20r